

長崎方言における属格主語*

猿渡 翌加

情報科学部 情報メディア学科

(2019年9月30日受理)

Genitive Subject in Nagasaki Japanese

by

Asuka SARUWATARI

Department of Media Science,

Faculty of Information Science and Technology

Abstract

This article examines the distribution of genitive subjects in Nagasaki Japanese (NJ). First, I will modify Ochi and Saruwatari's (2018) analysis of genitive case licensors in NJ; in particular, I will provide new data concerning licensor C. Second, I will examine genitive subjects in NJ in light of Hasegawa's (2008, 2010, 2011) condition for neutral descriptions in main clauses to argue that there is a remarkable consistency between the NJ data and Hasegawa's data. Since a genitive appears in NJ in both main and subordinate clauses, I argue that the condition for genitive subjects in NJ is to be attributed to a subject defocusing phenomenon along the line of Aoyagi's (1999) analysis.

キーワード ; 主格属格交替, 属格主語, 中立叙述, 新情報, 長崎方言

Keyword ; nominative genitive conversion, genitive subject, neutral description, new information, Nagasaki Japanese

* 本稿は、日本語文法学会第19回大会の内容(猿渡 2018)と博士論文(Saruwatari 2016)の2章の一部を加筆・修正したものである。

1. はじめに

主格属格交替は、標準語では (1a) のように名詞節 (連体修飾節) で起こることが言われており、属格主語が可能となる (Harada 1971, Miyagawa 1993, Ochi 2001, Hiraiwa 2001 etc.)。 (1b) のように、肥筑方言 (長崎県, 佐賀県, 熊本県, 福岡県の一部で話されている方言) では主節でも属格主語が生じる。

- (1) a. 太郎 {が・の} 読んだ本 (名詞節)
[標準語]
b. 花子の来た。(主節: 非対格動詞)
[標準語*; 肥筑方言✓]

意味解釈として、肥筑方言では久野 (1973) での中立叙述だと主語が「の」で標示され、総記の解釈では「が」になることが提案されてきた (神部 1992, 加藤 2005, Nishioka 2018)。久野 (1973) の総記と中立叙述の解釈は (2) にまとめてある。

- (2) 久野 (1973) の総記と中立叙述の解釈
a. 総記: 排他性, 焦点を伴う解釈。述語が恒常的状态・習慣的動作を表す場合。
b. 中立叙述: 客観的事態。述語が動作・存在・一時的状態を表す場合。

また、中立叙述の例文は (3) で、総記の例文は (4) になる。

- (3) 中立叙述の「が」
a. 手紙が来た。
b. 雨が降っている。
c. 机の上に本がある。
d. おや, あそこに太郎がいる。
(4) 総記の「が」
a. 太郎が学生です。(←誰が学生ですか)
b. 猿が人間の祖先です。(←何が人間の祖先ですか)
c. 太郎が日本語ができる。(←誰が日本語ができるか) (久野 1973)

肥筑方言では、(3) の「が」は全てノとして標示され、(4) の「が」はガとして標示される (Nishioka 2018)。したがって、焦点解釈の場合は、(5) のように属格主語は不適切となる。これは標準語の名詞節

でも焦点解釈を受ける場合は (6) のように属格主語が容認されないことと一致する。

焦点化

- (5) こん中じゃあ, 太郎だけ {が/*の} 行ったとばい。(初島 1998, Ochi and Saruwatari 2018)
(6) 太郎だけ {が/*の} 飲んだ薬
(Akaso and Haraguchi 2011, Miyagawa 2013)

本稿では、肥筑方言の中でも特に長崎方言の属格主語のデータを示し、長崎方言の属格主語の統語構造上の認可子と意味解釈において考察する。まず、統語的分析として Ochi and Saruwatari (O&S) (2018) で提案されている長崎方言の属格主語の認可子を見て、独立文において修正を行う。次に意味解釈について、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) で提案されている主文での中立叙述解釈条件の妥当性を長崎方言の属格主語の分布より考察する。主文だけでなく、長崎方言の属格主語は様々な従属節においても生じるため、青柳 (1999) の非焦点化の概念を用いて、長崎方言で属格主語が生じる場合は非焦点化であり、主語だけにフォーカスが生じることが回避されると述べる。

2. 肥筑方言の属格主語に関する先行研究

肥筑方言の先行研究で特に本論文と関わりがあるものを概観する。坂井 (2013, 2018), 加藤 (2005), Nishioka (2018), O&S (2018) の考察を見る。坂井 (2013, 2018), 加藤 (2005), Nishioka (2018) の分析では長崎方言のデータを説明できないことを指摘する。O&S (2018) においては、属格認可子の分析を概観し、長崎方言の主文の属格認可子に関して修正点を述べる。

2.1 坂井 (2013, 2018), 加藤 (2005), Nishioka (2018), O&S (2018)

2.1.1 坂井 (2013, 2018)

坂井 (2013, 2018) では、(7) の「有生性階層」と (8) の「他動性の階層」の2者を掛け合わせた階層でまとめている。熊本市方言話の格配列は (9) に示してある。

- (7) 有生性階層…1 人称>>2 人称>>3 人称>>親族・固有>>人間普通>>動物>>無生物

(8) 他動性の階層…他動詞主語 (A) >>意志自動詞主語 (Sa) >>非意志自動詞 (Sp)

(9) 熊本市の格配列

熊本市	代名詞		名詞			
	1 人称	2 人称	親族固有	人間普通	動物	無生物
A	G	G	G	G	G	G
Sa	G	G	G	G	G	GN
Sp	G	G	GN	GN	GN	GN

坂井 (2018) は熊本市方言の話者 (1名), 博多方言の話者 (1名), 甕島手打方言の話者 (2名) に聞き取り調査を行い, N系 (ノ) の限界線は方言により異なるが, 左上ほどG系 (ガ) のみ, 右下ほどN系となり, 高動作主ほどガで主語が標示され, 低動作主ほどノで主語が標示されると述べている。(9) より, 1人称, 2人称の主語の場合は, どのような動詞のタイプもG系 (ガ) のみとなる。名詞の中で, 親族固有名詞, 人間普通名詞, 動物名詞が主語の場合は, 非意志自動詞 (非対格動詞) の場合のみ, N系 (ノ) も許される。(10) は親族固有名詞の例である。

親族固有名詞 (坂井 2018)

- (10) a. 妹 {が/＊の} 壺ば倒した。¹ (A)
 b. 妹 {が/＊の} 登った。 (Sa)
 c. 妹 {が/の} 倒れた。 (Sp)

無生物においては, 他動詞はG系であるが, 意志自動詞, 非意志自動詞の場合, N系も許される。

無生物 (坂井 2018)

- (11) a. 矢 {が/＊の} ど真ん中ば打ち抜いた。(A)
 b. 山に雲 {が/の} 登ったね。 (Sa)
 c. 木 {が/の} 倒れた。 (Sp)

2.1.2 加藤 (2005), Nishioka (2018)

加藤 (2005), Nishioka (2018) は, (3) の中立叙

述の例文は, 肥筑方言 (熊本方言) では「の」で標示され, (4) の総記の例文では「が」で標示されることを述べている (神部 (1992) も参照頂きたい)。加えて, 加藤 (2005), Nishioka (2018) は属格主語はvP内で認可されることを主張している。(12) の状態述語動詞の主語の場合や(13)の意志自動詞 (非能格動詞) の主語の場合, そして(14a)の他動詞の主語の場合は, 属格主語は容認されない。

- (12) 太郎 {が/＊の} 英語のできると。
 (Kato 2007:120)

- (13) 学生 {が/＊の} 一生懸命働いたたい。
 (加藤 2005, Nishioka 2018)

- (14) a. 太郎 {が/＊の} そんなばこうたばい。
 「たろうがその本を買ったよ。」
 b. そんなば太郎のこうたばい。

(Kato 2007:120-121)

しかし, (14b) より目的語を文頭にかき混ぜると, 主語の「太郎」は「の」で標示される。したがって, 属格主語はvP内で認可されると主張している。

2.1.3 O&S (2018) の属格認可子 (D, weak v, C)

O&S (2018) では, 長崎方言での属格主語の認可子をDに加え, weak v, Cと提案している。²ここでは, 特に属格の認可子weak vとCについて概観する。O&S (2018) は, 非能格動詞 (意志自動詞) の場合でも属格が認可される場合があるとして, (16) を提示している。

長崎方言

- (15) *花子の走った。[非能格動詞]
 (cf. (1b) 花子の来た。)
 (16) a. 花子の走っとる。
 「花子が走っている。」
 b. 花子の走ったとばい。
 「花子が走ったんだよ。」

O&S (2018) は, Chomsky (2000) の一致操作 (Agree) を採用し, 属格認可子を説明している。(17) よりノは非対格動詞の場合認可されるが, 非能格動詞では認可されないため, (18) のように探索要素 (Probe) weak vが目標要素 (Goal) 「花子」を見つけ, 属格が認可される。(19a) より非能格動詞ではテイル (トル) になると属格主語が可能のため, (19b) テイル

(テ+オル)の非対格動詞オル(イル)の weak v により属格は認可される。(20a)より非能格動詞は C 要素トバイでも属格が可能ため、C 要素により属格が認可される((20b))。

weak v 認可 (O&S 2018) ³

- (17) a. 花子の来た。(非対格動詞)
b. *花子の走った。(非能格動詞)

(18) [TP [VP [VP Hanako-no k-]i-] ta]

- (19) a. 花子の走っとる。(テイル形)
b. [TP₂[VP₂[VP[TP₁[VP₁ Hanako-no [VP] v₁] T₁ (=te) oru] v₂] T₂]

C 認可 (O&S 2018)

- (20) a. 花子の走ったとばい。
「花子が走ったんだよ」
b. [CP [TP [VP Hanako-no [VP has-]i-] ta] to bai]

従属節では、長崎方言は標準語と異なり(21b)のように動詞のタイプに関わらず「時」などの C 要素によっても認可される。

- (21) a. [子どもの来た時]隣の部屋にいた。
(従属節：非対格動詞)
[標準語✓ (Miyagawa 2012) ⁴ ;
長崎方言✓ (O&S 2018)]
b. [子どもの笑った時]隣の部屋にいた。
(従属節：非能格動詞)
[標準語* (Miyagawa 2012) ;
長崎方言✓ (O&S 2018)]

長崎方言ではその他様々な C 要素によって属格が認可される((22))。

- (22) a. [花子 {が/の} 踊る {けん/なら}]会場
におるね。
b. [花子 {が/の} 踊るか]わからん。
(O&S 2018)

次項では、坂井(2013, 2018), 加藤(2005), Nishioka(2018)では長崎方言のデータを説明できないことを述べる。また、O&S(2018)に関しては、特に「トバイ」を使った C 認可の分析について修正すべき点

を述べる。

2.2 長崎方言のデータと本稿の目的

坂井(2013, 2018), 加藤(2005), Nishioka(2018)の分析は興味深いものである。坂井(2013, 2018)の格配列パターンは、長崎方言でもある程度共有される。⁵長崎方言でも(1b)の非対格動詞の場合は属格主語が許されるが、(23a)のように非能格動詞の場合は容認されない。また、他動詞の場合((23b))も容認されない。坂井が言うように、他動性が高いほど、属格主語の容認度は低くなると言えるだろう。ここまでは坂井(2013, 2018)や加藤(2005), Nishioka(2018)と同じ判断である。面白いことに、(24)のように非能格動詞の場合や他動詞の場合も、テイル形(トル/ヨル)⁶を付加することや終助詞バイを付加することにより容認されるようになる(テイル形においては O&S(2018)も参照頂きたい)。

長崎方言⁷

- (23) a. *花子の走った。[非能格動詞]
(cf. (1b) 花子の来た。)
b. *花子のそんなば買った。[他動詞]
(24) a. 花子の {走っとる/走りよる}。
「花子が走っている。」(O&S 2018)
b. 花子の走ったばい。
「花子が走ったよ。」
c. 花子のそんなば買いよった。
「花子はその本を買っていた。」
d. 花子のそんなばこうたばい。
「花子はその本を買ったよ。」

(24a)は、熊本市方言でも坂井(2013)で記述されているが、その説明はされていない。坂井(2013, 2018), 加藤(2005), Nishioka(2018)の分析では、(23)~(24)の長崎方言のデータを説明することはできない。O&S(2018)は、独立文で文末に「ト」と「バイ」の組み合わせが必要であることを述べているが((16b), (20a)), 「トバイ」は標準語では「のだよ」という意味となり、のだ文(埋め込み文)となるため純粋な独立文ではない。(24b)や(24d)のように「バイ」だけでも属格は認可されるため、独立文での属格主語の認可方法に修正が必要である。

本稿では、特に以下の三点を目的とする。統語的分析においては(25a)、意味解釈としては(25b, c)を目的とする。

- (25) a. 長崎方言のより新たなデータを集め、O&S (2018) が提案した属格認可子の修正を行う。
 b. 長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) で提案されている主文の中立叙述条件の妥当性を長崎方言の属格主語の分布から考察する。
 c. 主節と従属節の両方における長崎方言の属格主語の分布を踏まえ、長崎方言の属格主語の分布を青柳 (1999) の非焦点化の概念で捉えることができることを述べる。

3. 分析

O&S (2018) が提案した属格認可子 (D, weak v, C) において特に、主節の C 認可子の修正を述べる。その後、意味解釈 (中立叙述解釈) における先行研究の観点と長崎方言のデータを照らし合わせて考察を行う。まず、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) の中立叙述における標準語のデータと長崎方言の属格主語のデータを比較検証する。次に、主節と従属節の両方における長崎方言の属格主語の分布を捉えるため、青柳 (1999) の非焦点化の分析を用いて長崎方言データを考察する。

3.1 O&S (2018) の修正

ここでは、特に O&S (2018) の主文の C 認可子について考察し、修正案を述べる。O&S (2018) では、主文では、テイル形または、文末をトバイにすることにより認可されるとしている。

- (26) *花子の走った。[非能格動詞]

(cf. (1b) 花子の来た。)

- (27) a. 花子の走っとる。

「花子が走っている。」

- b. 花子の走ったとばい。

「花子が走ったんだよ。」

C 認可 (O&S 2018)

- (28) a. 花子の走ったとばい。

「花子が走ったんだよ」

- b. [CP [TP [VP Hanako-no [VP has- |i-] ta] to bai]



しかし、(29) のように、バイだけでも認可される。

- (29) 花子の走ったばい。「花子が走ったよ。」

ここで、「バイ」と「トバイ」の違いを考えてみる。長崎方言や熊本方言などの肥筑方言では文末がコピュラ (繫辞) で終わる場合や「バイ」が共起する場合にコピュラは音声化されない (熊本方言においては児玉 (2006) を参照頂きたい)。したがって、(30a) は以下のように分析されるべきである。長崎方言では (30b) になり、標準語のコピュラ「だ」が音声的に具現化されていない。標準語は (30c) のようになる。

- (30) a. 花子の走ったとばい。

- b. [CP [PredP[CP [花子の 走った] と] Cop(=∅)]
ばい] (長崎方言)

- c. [CP [PredP[CP [花子が 走った] ん] Cop(=だ)]
よ] (標準語)

(30b) は CP 「花子の走ったと」が PredP に埋め込まれた形になり、従属節の構造と言える。したがって、独立文 (主文) での C 認可の属格主語の例としては、「バイ」だけが付加した文 (31) がより適切であると考える。構造は (31b) となる。

- (31) a. 花子の走ったばい。(= (29))

- b. [CP [TP [VP Hanako-no [VP has- |i-] ta] bai]



本項では、O&S (2018) の主文での C 認可子の修正を行った。次項では、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) の分析の妥当性を見る。

3.2 長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) と長崎方言のデータの関係

ここでは、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) の中立叙述のデータと条件を長崎方言の属格主語のデータと生起条件に照らし合わせて考察する。長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) の中立叙述の条件を見る前に、まず、久野 (1973) の中立叙述の解釈の要点を整理する。そして、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) の中立叙述解釈の分析を見る。

久野 (1973) では (32) のように中立叙述の解釈として「一時的な状態を表す述語」という記載はあるが ((32a)), テイル形という指定はない。また従

属節・名詞節では総記の解釈を受けるものが中和され中立叙述の解釈になると述べている ((32b))。

(32) 中立叙述 (久野 1973)

- a. 中立叙述のガは、独立文では述部は動作動詞、状態動詞、一時的な状態を表す述語である。
- b. 従属節・名詞節においては中立叙述と総記の区別は中和される。

長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) は, Kuroda (1965, 1972, 1992) の Thetic judgment⁸ (話者が眼前の状況を全体として一つに把握し認識する) を発展させ, 主文に限った中立叙述の解釈を「提示文」として定義している ((33))。

(33) 中立叙述の定義 (長谷川 2011:99): 主文のガ格主語の中立叙述 (ND) 解釈の条件: 提示文

- a. 述語のタイプ: 「動作・存在・一時的な状態」述語 (動作動詞は「テイル」形)
- b. 主語の人称: *1 人称, *2 人称 (つまり, [-話し手, -聞き手]要素)
- c. 疑問文, 命令文, 依頼文とは相容れない→[断定文]でのみ可能。

(34) ~ (36) より, 中立叙述の解釈には動作動詞はテイル形やヨなどの「伝達」と関わるタイプの終助詞が必要であることが分かる。⁹

- (34) a.*?おや, 太郎が本を読んだ。
- b.*?ほら, 花子が電話する。
- (35) a. おや, 太郎が本を読んでいる。
- b. ほら, 花子が電話している。
- (36) a. おや, 太郎が本を読んだよ。
- b. ほら, 花子が電話するよ

また, 主語の人称や文タイプに制限があることが (37) より分かる。

- (37) a. *そこにあなたがいる。
- b. *私が病気だ。
- c. 誰が来ましたか? (総記解釈のみ)¹⁰
- d.*? 花子がどこにいますか? ¹¹

しかし, 従属節では述語のタイプ, 主語の人称, 文のタイプに関わらず中立叙述の解釈になる ((38),

(39))。

- (38) a. 君は[太郎が日本語ができる]ことを知っていますか?
- b. [私が食べたい]ものはおすしです。
- (39) a. 誰も[そこにあなたがいる]ことに気づいていない。
- b. [私が病気だ]から子供達も元気がない。
- c. 太郎は[花子がどこにいるか]知らない。

「聞き手 (2 人称)」「話し手 (1 人称)」は, 新情報とはなり得ず, 疑問文では情報が欠けているため, 「新情報の提示」という機能とは合致しないと長谷川は説明している。1 人称, 2 人称は会話では前提となっているため, 新情報にならない (久野 1973)。命令文, 依頼文では主語は聞き手 (2 人称) である (三原・榎原 2012)。また疑問文では, 主語が疑問詞の場合を除き, 主語は主題 (前提) となりハになる (久野 1973)。これらの新情報の観点から, (37) は中立叙述の解釈には合わないことになる。

次に, 長谷川の中立叙述のデータと長崎方言のデータとを比較する。長崎方言の調査では, 動作動詞「買う」, 「走る」を使ったため, それらの動詞に変えて, 長谷川のデータをここに再掲する。

標準語 (長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010))

- (40) a.*?おや, 太郎が本を買った。
- b.*?ほら, 花子が走る。
- (41) a. おや, 太郎が本を買っている。
- b. ほら, 花子が走っている。
- (42) a. おや, 太郎が本を買ったよ。
- b. ほら, 花子が走るよ

長崎方言¹²

- (43) a.*?太郎の本ば買った。
- b.*?花子の走る。
- (44) a. 太郎の本ば買いよる。
- b. 花子の走っとる/走りよる。
- (45) a. 太郎の本ば買ったばい。
- b. 花子の走るばい。

長崎方言ではテイル形「トル/ヨル」や伝達を表す「バイ」がない場合の (43) は, 属格主語が容認されない。

また, 主語の人称や文タイプに制限があることが (46) より分かる。

長崎方言

- (46) a. *そこにあんたのおる。
 b. *うちの病氣ばい。
 c. ?? だいの来た？
 d.*? 花子のどこにおる？

長谷川の提示文としての中立叙述の条件は長崎方言でも非能格動詞や他動詞がテイル形や終助詞バイが共起する場合に属格主語が生じることと一致する。しかし、長谷川の提示文は主文に限定しているため、従属節での属格主語（久野（1973）において従属節で総記解釈が中和され、中立叙述の解釈になる場合）を統一的に説明することができない。長崎方言の従属節での属格主語の例は（47）、（48）である。

長崎方言

- (47) a. あんたは[太郎の日本語のできる]ことば知
 っとる？
 b. [うちの食べたか]ものはおすしよ。
 (48) a. 誰も[そこにあんたのおる]ことに気づいと
 らん。
 b. [うちの病氣や]けん子供達も元気のなか。
 c. 太郎は[花子のどこにおるか]知らん。

主節と従属節両方において長崎方言の属格主語の分布を捉えられる、より包括的な分析を探る必要がある。

3.3 長崎方言の属格主語と非焦点化

前項では、長谷川の提示文のデータは主文における長崎方言の属格主語のデータと一致することを確認した。長崎方言は様々な従属節でも属格主語が生じるため、本項では、主節と従属節の長崎方言の属格主語を統一的に捉えられるより包括的な分析を探る。青柳（1999）の非焦点化の概念を用いて考察する。

3.3.1 非焦点化（青柳 1999）

まず、青柳（1999）の非焦点化の概念を見る。久野（1973）は、「総記」は①「排他性」と②「焦点」の二つの部分を含むと主張している。これに対して青柳（1999）では、久野（1973）の「総記」とは義務的焦点化のことでありと主張している。また青柳は、従属節で「総記」が中和されるとする久野の主張に対して、中和は義務的焦点の非焦点化であると

説明している。

最初に①の「排他性」について青柳（1999）の分析を見る。久野は「総記」のガ格名詞句は排他性があると主張しているが、（49a）の問いの答え（49b）は久野での「総記」の解釈を受けているが、（50）を続けても談話は破綻しないため、（49c）とは異なり（49b）は必ずしも排他性を含意しないことになる。

- (49) a. （クジラ、ペンギン、カモノハシのうち）
 何が哺乳類ですか？
 b. クジラが哺乳類です。
 c. クジラだけが哺乳類です。
 (50) そして、カモノハシも哺乳類です。
 （青柳 1999:772）

したがって、久野の「総記」とは必ずしも排他性を含意しない（青柳 1999）。

次に②の「焦点」について青柳（1999）の考察を見る。焦点は新たな情報を付加する上で欠くことができない要素である（Vallduví 1992）。どの文にも焦点は義務的に存在すると言える。（51b）を見ると「太郎」に義務的焦点があることが分かるが、（51b）が埋め込まれた（52）では「太郎」には焦点がある必要はなくなる。

- (51) a. 誰が学生ですか？
 b. 太郎が学生です。
 (52) みんな [太郎が学生だ] と言いました。
 （青柳 1999:780-781）

青柳は、「総記」解釈が中和されることについて義務的焦点が非焦点化されることだと結論付けている。青柳（1999）の義務的焦点と義務的焦点の非焦点化について理解したところで、青柳が前提としている Vallduví（1992）の情報構造を概観する。Vallduví の提案では（53）のように文は FOCUS（焦点）と GROUND（前提）に分けられる。更に GROUND は LINK と TAIL に分けられる。LINK は主題であり、TAIL は既知情報の一部であるが、主題ほど卓越した要素ではない。¹³

- (53) a. S={FOCUS, GROUND}
 b. GROUND={LINK, TAIL}

Vallduví の情報構造を用いると、総記解釈（54a）

は (54b) のように分析できる (青柳 2010)。

- (54) a. ジョンが学生です。
b. [_F ジョンが] [_G 学生です]

次に、青柳 (1999) の非焦点化の概念を用いて長崎方言のデータを考察する。

3.3.2 長崎方言のデータの考察

ここでは青柳 (1999) の非焦点化の概念を用いて長崎方言のデータがどのように分析されるのかを示す。まず、非対格動詞のデータから考察する。長崎方言のデータで非対格動詞の場合は文全体が新情報であり GROUND が無い全て FOCUS の文となり、(55) と分析できる。

- (55) [_F 花子の来た]

Vallduví (1992) では、文全体が新情報の文は、久野 (1973) の中立叙述の文、Kuroda (1965, 1972, 1992) の *thetic judgment* であるとしている。¹⁴

次に、非能格動詞のデータを考察する。(23a) の非能格動詞文は、(56a) のように分析でき主語だけに焦点が当てられる。しかし、(24a) や (24b) のようにテイル形やバイを付加すると、(55) 同様に、文全体が FOCUS となり、それぞれ (56b), (56c) のように分析される。¹⁵

- (56) a. [_F 花子が][_G 走った]
b. [_F 花子の走りよる]
c. [_F 花子の走ったばい]

最後に従属節について考える。従属節の例として (57) を考える。

長崎方言

- (57) あんたは[太郎の日本語のできる]ことば知るとる?

従属節 (57) では、太郎だけにフォーカスが当たっておらず、(52) の標準語のデータ同様に非焦点化として分析できる。

本項では、まず、主文における長谷川の中立叙述のデータと長崎方言の属格主語のデータを照らし合わせ、長谷川の定義の妥当性を見ることができた。

しかし、長崎方言では様々な従属節でも属格主語が生じるため、青柳 (1999) の非焦点化の概念を用いて、長崎方言で属格主語が生じる場合は、主語だけに焦点が当たることが回避された非焦点化であり、この非焦点化の分析で、主文だけでなく従属節においても統一的に長崎方言の属格主語を捉えることができることを述べた。

4. 結論

本稿では、長崎方言から新たな属格主語のデータを提示し、考察を行った。まず、統語的分析として、O&S (2018) の属格主語の認可子において独立文での C 認可子の修正を述べた。そして、意味解釈として、肥筑方言の属格主語は中立叙述の解釈であることが言われているので、主文の中立叙述の条件として長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) が提示しているデータと長崎方言のデータを比較し検証した。結果として、主文における長谷川のデータは、長崎方言で属格主語が生じるデータと一致していることが分かった。しかし、長崎方言の属格主語は従属節にも生じるため、より包括的に説明できる分析として、青柳 (1999) の非焦点化の分析を用いた。青柳の非焦点化の分析では、様々な従属節においても長崎方言で属格主語が許されることを捉えることができることを述べた。

注

- 1) 熊本方言、長崎方言では、目的格は「ば」として具現化される。
- 2) O&S (2018) は、標準語の属格認可子は、(i)と考えており、標準語と長崎方言の違いは、長崎方言では weak v と C が単独で認可できる点であるとしている。
(i) 標準語の属格主語の認可子:
a. D (Miyagawa 1993, Ochi 2001 etc.)
b. 特定の従属節における weak v (Miyagawa 2012)
- 3) 構造上、属格主語は vP 内に位置するという主張に関しては、O&S (2018), 加藤 (2005), Nishioka (2018) を参照頂きたい。
- 4) Miyagawa (2012) の Genitive of dependent tense (GDT) の定義は以下の通りである。
(i)GDT: The combination of weak v + dependent

tense licenses genitive case in Japanese.

- 5) 長崎方言の格配列パターンは、坂井 (2013, 2018) での熊本方言に近いと考えられる。しかし、文末助詞やテイル形を付加すると、N 系が許される。1 人称, 2 人称主語においては、3 節で考えたい。坂井 (2018) では、無生物主語で意志自動詞の例として (11b) を提示しているが、主語が無生物なので、意志があるかどうか検討する必要があると考えられる。
- 6) テイル形に関しては、長崎方言では「トル」「ヨル」の形がある。ここでは厳密な違いは考察しないが、「ヨル」が進行の意味、「トル」が結果状態の意味の傾向があると思われるが、完全にそのように分けられるか、更なる調査が必要である。O&S (2018) では (19b) で「トル」の構造が表示されているが、「ヨル」の場合においても「オル」の上にある weak v_2 により認可されると考えられる。
- 7) 本研究で扱う長崎方言のデータは、長崎県内で生まれ、ほぼ生涯を県内で過ごしている 20 代から 30 代のインフォーマントに調査したものである。
- 8) Kuroda (1965, 1972, 1992) は Thetic judgment と Categorical judgment を以下のように分けている。
 (i) a. Thetic judgment: 話者が眼前の状況を全体として一つに把握し、認識する。
 b. Categorical judgment: ある対象を認識し、その対象の属性を認識する。陳述関係 (predicational relation), 主題と述部となる。
- 9) この場合、タ形やル形が許されるのは、動作・事象の「始動」「進行」「完了」が眼前で瞬間的に観察される、限定的な場合のみである (長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010))。
- 10) 通常の疑問文としては総記解釈のみであると考えられる。
- 11) 長谷川 (2008) では、疑問詞疑問文は前提を伴うため、主語以外の要素を問う場合は、主語は「ハ」で標示される (久野 1973 も参照頂きたい)。
- 12) 「ほら」、「おや」、「あっ」などを付けると、動作・事象の「始動」「進行」「完了」が眼前で瞬間的に観察される限定的な場合の読みでインフォーマントの方がとる傾向があるため、あえて、「ほら」、「おや」などは付けていない。ここでのデータが示していることは、属格主語の場合は、眼前事象に使える進行形にする必要があり、長谷川 (2008, 2011), Hasegawa (2010) のデータと一致すると言える。「ほら」、「おや」が構造上に及ぼす効果と影響は今後の研究課題としたい。
- 13) (ia) の質問の答えは、(ib) のような情報構造となる (Vallduví 1992)。
 (i) a. What does John drink?
 b. [_G [_L John] [_T drinks]] [_F beer]
- 14) Vallduví (1992) は、文全体がフォーカスの例として (i) を挙げている。
 (i) Waiter! [_F There's a fly in my cream of broccoli soup!] (Vallduví 1992:51)
- 15) 神部 (1992) によると九州南部地方では上代からの格標示 (i) を受け継ぎ、主語が尊敬の対象かどうかで主語の格標示が異なる。
 (i) a. ガ: 尊敬
 b. ノ: 非尊敬 (橋本 1969, 野村 1993)
 熊本市方言 (坂井 2013) や長崎方言では尊卑説には必ずしも従わない。(ii) のように、主語は乞食であるにも関わらず、動詞が非対格動詞なので、属格主語が可能となる。
 (ii) 乞食の来た。
 (長崎方言, 熊本市方言は坂井 (2013) を参照)
 また、長崎県内でも諫早市や島原市では、(iii) 「～ス・～ラス」という敬辞を述語に付けることにより、属格主語が許される現象がある (熊本市方言は坂井 (2013) を参照)。
 (iii) 田中さんの歩かした。
 「田中さんが歩かれた」
 この「～ス・～ラス」は、「シャル・サッシャル」から派生したと考えられ、シャルは「せ」+「ラル (ラレル)」で構成される (藤原 1978)。
 (iv) シャル=せ+ラル (ラレル)
 尾上 (1998:82) は、ラレル形を「出来文」とし、「事態を個体の動きとして語らず、全体として発生、生起するものとして語る文」と述べている。Kuroda (1965, 1972, 1992) の Thetic judgment や長谷川の提示文にも一致するものである。この敬辞が、新情報として物事を捉えることに貢献していると考えられる。

参考文献

- 1) 青柳宏, 「いわゆる『総記』のガに関する覚え書き」『アカデミア』文学・語学編 67, pp.769-788, 1999.

- 2) 青柳宏, 「日本語におけるかき混ぜ規則・主題化と情報構造」, 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究-命題を越えて-』 pp.193-225, 開拓社, 2010.
- 3) 尾上圭介, 「文法を考える-5-(1)出来文」 『日本語学』 17-7, pp.86-93, 明治書院, 1998.
- 4) 加藤幸子, 「熊本方言における『が』と『の』の使い分けに関して」 『言語科学論集』 9, pp.25-36, 東北大学大学院言語科学専攻, 2005.
- 5) 神部宏泰, 『九州方言の表現的研究』 和泉書院, 1992.
- 6) 久野暉, 『日本語文法研究』 大修館書店, 1973.
- 7) 児玉望, 「熊本方言の指定助動詞」 『ありあけ 熊本大学言語学論集』 5. 71-90, 2006.
- 8) 坂井美日, 「現代熊本市方言の主格標示」 『阪大社会言語学ノート』 11, pp.66-83, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, 2013.
- 9) 坂井美日, 「九州方言における主格標示の使い分けと動作主性」 第 156 回日本言語学会予稿集, 2018.
- 10) 猿渡翌加, 「中立叙述の条件—長崎方言の属格主語からの提案—」 第 19 回日本語文法学会, 2018.
- 11) 野村剛史, 「上代のノとガについて (上)」 『国語国文』 62-2, pp.1-17, 1993.
- 12) 長谷川信子, 「提示文としての中立叙述文」 金子義明・菊地朗, 高橋大厚, 島越郎 (編), 『言語研究の現在: 形式と意味のインターフェース』 pp.62-80, 開拓社, 2008.
- 13) 長谷川信子, 「統語構造と発話の力: 日本語の CP 領域現象から」 武内道子・佐藤裕美 (編), 『発話と文のモダリティ』 (神奈川大学言語学研究叢書 1) pp.89-114, ひつじ書房, 2011.
- 14) 橋本進吉, 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店, 1969.
- 15) 初島康子, 「佐賀方言の研究-主格の助詞『ノ』と『ガ』の使い分けについて」 『東京女子大学言語文化研究』 7, pp.51-64, 東京女子大学, 1998.
- 16) 藤原与一, 『方言敬語法の研究』 春陽堂書店, 1978.
- 17) 三原健一・榎原実香, 「地図製作計画における日本語の命令文」 『日本語・日本文化研究』 22, pp.1-16, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻, 2012.
- 18) Akaso, Naoyuki and Tomoko Haraguchi, On The Categorical Status of Japanese Relative Clauses. *English Linguistics* 28. pp.91-106, 2010.
- 19) Chomsky, Noam, Minimalist Inquiries: The Framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. pp.89-156. Cambridge, Mass.: MIT Press, 2000.
- 20) Harada, Shin-Ichi, Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. *Gengo Kenkyu* 60. pp.25-38, 1971.
- 21) Hasegawa, Nobuko, Thetic judgment as presentational. *Journal of Japanese Linguistics* 26. pp.3-23, 2010.
- 22) Hiraiwa, Ken, On Nominative-Genitive Conversion. *MIT Working Papers in Linguistics* 39. pp.66-125, 2001.
- 23) Kato, Sachiko, Scrambling and the EPP in Japanese: From the Viewpoint of the Kumamoto Dialect in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 55. pp.113-124, 2007.
- 24) Kuroda, S.-Y, *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral Dissertation, MIT, 1965.
- 25) Kuroda, S.-Y, The Categorical and the Thetic Judgments. *Foundations of Language* 9. pp.153-185, 1972.
- 26) Kuroda, S.-Y, Judgment Forms and Sentence Forms. In Kuroda, S.-Y.(ed.) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*. pp.13-77, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers, 1992.
- 27) Miyagawa, Shigeru, LF Case-Checking and Minimal Link Condition. *MIT Working Papers in Linguistics* 19. pp.213-254, 1993.
- 28) Miyagawa, Shigeru, *Case, Argument Structure, and Word Order*. New York: Routledge, 2012.
- 29) Miyagawa, Shigeru, Strong Uniformity and Ga/No Conversion. *English Linguistics* 30. pp.1-24, 2013.
- 30) Nishioka, Nobuaki, On the Positions of Nominative Subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect. *MIT Working Papers in Linguistics* 87. pp.165-177, 2018.
- 31) Ochi, Masao, Move F and Ga/No Conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 10. pp.247-286, 2001.
- 32) Ochi, Masao and Asuka Saruwatari, Nominative

Genitive Conversion in (In)dependent Clauses in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 87. pp.191-202, 2018.

- 33) Saruwatari, Asuka, *Nominative and Genitive Cases in Japanese: From Dialectal and Cross-Linguistic Perspective*, Doctoral Dissertation, Osaka University, 2016.
- 34) Vallduví, Eric, *The Informational Component*. New York: Garland, 1992.
- 35) Vallduví, Eric, Structural Properties of Information Packaging in Catalan. In Katalin É Kiss (ed.) *Discourse Configurational Languages*. pp.122-152. New York: Oxford University Press, 1995.

